タンザニアのママ・ナ・ムトトプロジェクトは、お母さんと赤ちゃんのいのちをまもる活動です。
JOCSがTAHO（タボラ大司教区保健事務所）と協力して2018年から進めてきました。
お母さんと赤ちゃんが、産前産後、分娩時に適切なケアを受けられることをめざしています。

活動目標のひとつに、病院スタッフが新生児蘇生の技術を習得することがあります。新生児蘇生とは、出生直後に無呼吸状態に陥った赤ちゃんのいのちをまもる方法です。

第一段階として、外部機関の研修を活用して、それぞれの病院で指導役を担えるようなスタッフの育成をめざしました。そのスタッフが中心となり同僚たちと訓練を積むことで、より多くのスタッフが新生児蘇生法を習得できると考えたためです。

外部機関の研修は6日間おこなわれ、参加者たちは分娩管理から新生児蘇生法まで分娩期の一連の助産技術を集中的に学びました。聖アンナ・ミッション病院から参加したのは、看護助産師のシスター・ローズです。「この研修に参加できたのは神様の祝福です。産婦の管理や、新生児蘇生など新生児に必要なケアを練習し、自身の技術をレベルアップすることができました。この学びを、これから病院の同僚たちへ伝えていきたいです」

研修のあと、シスター・ローズは早速、病院内でのトレーニングの仕組みを整え、毎朝約15分、同僚たちと共に新生児蘇生法の実技トレーニングを始めました。「トレーニングを始めてから病院での死産や新生児死亡数が減りました」とシスター・ローズは話します。数字に表れた明らかな変化に自信を得たスタッフたちは、より熱心にトレーニングに取り組むようになりました。

「これから一歩ずつ足場を固め、体制を整えていきたいと思います。時間はかかりますが、この活動が母と子のいのちをまもることにつながるのです」

自分たちの努力で救えるいのちがあることを知り、病院スタッフは一致団結して前に進んでいます。スタッフたちの働きをこれからも見守り、お支えください。

シスター・ローズ